

近世における焼畑耕作の実態についての再検討

— 大井川の上流地域を事例として —

伊 藤 寿 和

一 はじめに

近年、筆者は近世における焼畑百姓と焼畑農法の実態に関して、全面的な再検討を続けている¹⁾。その結果、これまでに蓄積されてきた佐々木高明氏をはじめとする日本の焼畑に関する諸研究²⁾は、現地調査をおこなった時点での焼畑百姓と焼畑農法の実態であり、古代・中世以来の山地を酷使しない近世前期の「一年作り」・「二年作り」の短期的な耕作の農法から、近世中期以後に主流となる山地をより酷使する「三年作り」から「四年作り」「五年作り」の中・長期的なローテーションの耕作へと、その農法を大きく変化させてきたことが判明した。また、焼畑百姓の家族構成と通婚・奉公など、焼畑山村に暮らす人々の移動の実態に関しても、すでに復原と検討を試みている³⁾。

けれども、再検討を要する課題もなお残されている。その一つが、近世における焼畑禁止令の発令と焼畑耕作地拡大の実態との整合性であり、もうひとつは近世における焼畑耕作の実態である。

前者の近世における焼畑の耕作面積の拡大に関しては、管見の範囲では、飛騨・白川郷を事例とした溝口常俊氏の詳細な復原・研究⁴⁾が当時の一次史料を活用した唯一のものである。その推移を四つの時期に区分し、時代が下るにしたがって焼畑の耕作面積が減少するのではないことを解明された。すなわち、①元禄期以前の近世前期までは、比較的小規模な焼畑が屋敷地の近くに営まれていた（初期）。②近世の中・後期以後は近隣の山地に拡大した（拡大期）。③明治後期には焼畑が遠方の山地にも拡大した（全盛期）。④大正期以後、焼畑が次第に衰退してきた（衰退期）。

溝口氏が解明された近世中・後期における焼畑面積の拡大と、幕府や各藩の領主たちが発令した焼畑禁止令との整合性に関しては、別途の再検討する余地が残されていると判断される。

この点に関しては、千葉徳爾氏の先行研究⁵⁾が多くの示唆を与えてくれる。すなわち、千葉氏は天竜川流域の旧佐久間町（現在の浜松市内）の近世における焼畑の実態を復原・検討し、近世における焼畑の拡大をすでに指摘され、近世の史料に記載された所有権としての焼畑と慣行上の利用権としての実態の差に注意を促している。さらには、検地帳をはじめとする関連史料に記載・登録されている焼畑に、常に作物が栽培されているとは限らないと鋭く指摘されている。

本稿は、溝口氏と千葉氏の研究に導かれながら、千葉氏と同じく静岡県北域の大井川の上流域に位置する焼畑山村を具体的な事例として、前稿で論じ残した近世における焼畑の拡大と幕府・領主から発令された焼畑禁止令との整合性の問題と、焼畑百姓による焼畑耕作の実態に再検討を加えることとした。

その際、千葉氏が明記された「これは決して中世的焼畑の姿ではなく、(中略)必ずしも前代の社会的・経済的な事情と同様な耕作体系をとり得たとはいいがたいと考えられるからである。筆者自身の反省を含めてかような点に無関心に採集された従来の焼畑資料については、今後の利用上再検討の余地があるように思われる。」の助言を常に心に留め置いて、近世以前における焼畑耕作の実態と変化、すなわち、焼畑禁止令の発令と焼畑面積拡大の実態に関して、さらなる再検討と解明を進めたいと思う。

二 近世における焼畑禁止令の発令とその実態

本稿において検討を加えるのは、前稿でも扱った静岡県北域の大井川上流域の典型的な焼畑山村である。具体的には、近世の寸又(図1)とその周辺の山間村落を主な事例として、幕府代官によって発令された焼畑禁止令に関連する史料を、年代順に検討することから始めたい。

まず、寸又が元禄15年(1702)末に駿河国上田村の枝郷から、駿河国千頭村の枝郷へと所属替えをなされるまでの、焼畑に関する用語の確認からしておきたい。

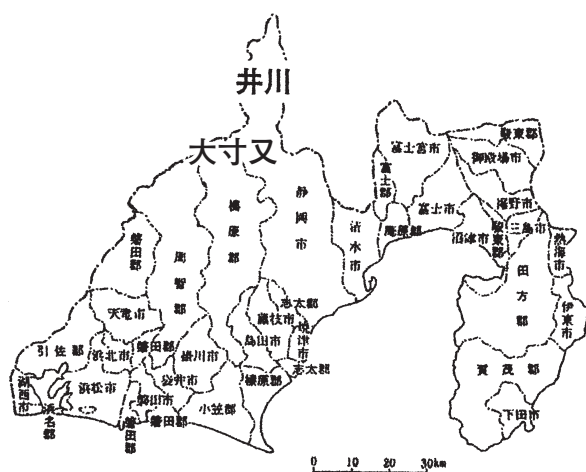


図1 寸又地域の位置(昭和50年代)

寛永年間(1624~1643)に代官所から下された上田村の「年貢請取状」⁶⁾によれば、一貫して「屋き畑分」や「屋き畑年貢」の表記が用いられており、慶安1年(1648)の「定納金請取状」にも「焼畑役」と記載されており、公的な表記は「焼畑」であったと考えられよう。一方、元禄2年(1689)年の「年貢皆済状」以後は「切畑役」の表記が一般的となり、公的な表記が「焼畑」から「切畑」へ変更されたことが判明する。前稿で論じたように、周辺の村々では、すでに17世紀の半ばに公的な表記として「切畑」を用いている

事例も散見され、上田村では少し遅れて「切畑」の用語の使用が始まったと考えられる。

なお、付言しておけば、近世の前期から中期の関連史料によれば、千頭村では焼畑を意味する「切畑」と、山地の斜面で営まれていた「山畑」とは明確に区別して記載されており、青部村においても同様に書き分けられていることには十分な注意が必要である。

次に、実際に発令された焼畑禁止令を引くこととする。

史料1 延宝6年(1678) 遠州駿州の山中辺に建てられた高札⁷⁾

- 一 山内之儀は不及申、近所之山にても、火を付焼候事堅可為停止、(後略)

史料1は、管見の範囲において確認しうるこの地域で最も古い焼畑の禁止令である。本稿で検討を加える大寸又および周辺の焼畑山村に対して、山地の荒廃や水害の多発を防ぐために、駿府の代官所から発令された焼畑禁止令が記された高札の写しであると判断されよう。

史料2 天和1年(1681) 両川根永盛等に関する覚書⁸⁾

- 一 右之通、両川根共_ニ永盛を高_ニ被成、(中略)山作焼畑法度_ニ被仰付、六年以来山作不仕、何共迷惑仕候、(中略)御慈悲_ニ前々之通、焼畑御免被遊可被下候、右山作之儀ハ、権現様以来作仕来、少_茂新規_ニ焼畑不仕候、(中略)前々之通、焼畑御免被成下候様_ニ奉願候御事、

史料2によれば、大寸又が後に所属する千頭村をはじめとする遠州領の川根地域の村々には、17世紀の後半に、幕府の代官所より山地の荒廃や水害の多発などを防ぐために、山中における焼畑耕作を禁止する「山作焼畑法度」が重ねて出されていたことが判明する。そのため、山中での重要な食糧確保の生業を禁じられた両川根の村々が、代官所に対して焼畑耕作の再開の許可を求めたものが本史料である。特に留意すべきは、史料の後半に「右山作之儀ハ、権現様以来山作仕来、少_茂新規_ニ焼畑仕候、」と明記されているように、かねてより耕作してきた由緒を有する焼畑のみ営み、新規に焼畑を伐り拓かないことを再開の条件として提示していることが重要である。

したがって、大寸又をはじめとする遠州・駿州の北部山間地域に広く展開していた焼畑山村の百姓にとって、17世紀の後半には、原則として新規の焼畑が認められず、旧来よりの耕作の由緒を有する焼畑のみが許可されていたと判断されよう。

このことは、次の史料からも明らかである。

史料3 元禄8年(1695) 大寸又新屋敷改めにつき小河内村百姓等請書⁹⁾

- 一 拙者共村々、只今迄有来り候焼畑之外、重_重一切焼畑仕間敷候と被仰付、奉畏候、向後少成共、焼畑仕間敷候、

史料4 元禄15年(1702) 駿遠国境裁許状写¹⁰⁾

次ニ、寸又入百姓、八年以前上田村高_ニ結之家数貳拾五軒有之、(中略)有来外向後新発焼畑不致之、(後略)

少なくとも、元禄年間までは、幕府代官により発令された焼畑禁止令に基づいて、大寸又をはじめとする焼畑山村の村々において、新規の焼畑禁止令が守られていたことが判明する。

史料5 貞享5年(1688) 焼畑禁止の触れにつき請状¹¹⁾

- 一 方々山々そうり切取作場_ニ仕間敷旨、(中略)今度又候御吟味被成_ニ付、(中略)自今以後、新山そうり切候ハハ、我々共何様之曲事_ニも可被仰付候、

大寸又 八 三 郎 印

同 所 四郎左衛門 印

海野弥兵衛殿

大寸又の焼畑百姓である八三郎と四郎左衛門の両名が、所属替え前の母村である上田村の海野弥兵衛に書き送ったこの請状によれば、「方々山々」「今度又候御吟味被成_ニ付」と記されているように、大寸又の山中はもとより、周辺の村々での新規の焼畑を営む禁止令が再度出されており、その禁止令に基づいて、旧来よりの焼畑耕作のみに従事する旨の請状を提出していることが確認できる。ただし、「今度又候」と明記されているように、このように新規の焼畑禁止令が度々出

されていると言うことは、実態としては、家族と人口の増大にともなって、広大な山中において新規の焼畑耕作が営まれていた可能性も想定しておく必要があろう。

また、この史料で特に注目されるのは、伐り払うべき焼畑用地の森林を「そうり」、伐り払った後の焼畑耕地を「作場」と明確に区別して使い分けていることである。

野本寛一氏の調査¹²⁾によれば、大寸又にはほど近い長島地区（現在の本川根町）では、先祖がかつて焼畑を営んだ土地を「切り地」と呼び、焼畑として伐り拓かれたことのない山地を「深山」と呼び分けていたことは重要である。

史料6 元禄15年（1702） 国境争論につき千頭、犬間、奥泉より差出し証文控¹³⁾

一 式拾七年以前、従巡見御奉行様被仰付候趣、焼畑停止之趣、御支配方度々急度被仰付候と伝承候御事、

この史料によれば、元禄15年より27年前の延宝3年（1675）年頃に、奉行がこの地を巡見し、山中で営まれていた焼畑の禁止令を発令していたことを再確認しうる。上記の史料2に記されている「山作焼畑法度被仰付、六年以来山作不仕、何共迷惑仕候、」の六年以来とは、この延宝3年（1675）頃に発令された焼畑禁止令である可能性が高いと判断されよう。

そうであれば、史料1より古い焼畑禁止令であると考えられる。

史料7 元禄16年（1703） 大寸又作場改帳写¹⁴⁾

右之通、立会吟味仕、帳面差上申候、右之作場あれ次第せんぐり作仕候、此外作場一切無御座候、

元禄十六年三月

名主・組頭・百姓 印

袋井之

御役人様 川井友右衛門様

吉野手左衛門様

この史料は、大寸又が駿州の上田村から遠州の千頭村へ所属替えがなされた翌春に、千頭村の名主・組頭立ち合いの上、新規の焼畑禁止令に触れない、大寸又の広大な山中で営まれてきた旧来よりの焼畑を一枚ずつ書き上げ、代官所に提出した史料の写しである。史料2と同じく、伐り拓いて焼畑が営まれていた耕地は「作場」と表記されている。

かように、少なくとも、17世紀の後半の大井川上流のこの地域においては、幕府の代官所による新規の焼畑禁止令が度々発令され、その禁止令が現地において守られ、旧来より伐り拓いて耕作されてきた由緒ある焼畑のみ、耕作が継続されていたことが判明する。

この事実は、前稿で明らかにしたように、近世前期において、古代・中世以来の山地を酷使しない一年間のみ耕作する「一年作り」から、二年間耕作する「二年作り」や、更には、17世紀の後半から18世紀に、同じ山地をより酷使する「三年作り」や「四年作り」「五年作り」など、中期・長期の焼畑農法のローテーションが成立する要因のひとつとして、発令されていた新規の焼畑禁止令に対して、旧来の大家族制度が崩れて、焼畑山村における家族数と人口の増大の実態と、同一の山地を中・長期間に酷使する農法の登場は、関連する可能性が高いと想定されよう。

では、この地域では、いつまで、かような新規の焼畑禁止令が守られていたのであろうか。

史料8 延享5年（1748） 千頭村五人組帳¹⁵⁾

附 山中焼山畑致来候所ハ格別、野火付候義、堅御停止付、其旨被仰渡奉畏候御事

この「五人組帳」が作成された近世中期の頃までは、大寸又とその周辺の地域では、野火はもとより、新規の焼畑禁止令が出され、それが原則的には守られていた可能性が高いように思われる。

史料9 文化12年（1815）取極メ口一礼之事¹⁶⁾

植木広め候ては家業に相障りや、以って百姓難儀の儀も之有筋、自今已来ハ縦手山の儀と心得ても、焼畑なまれの内には決して林木等植え広め申す間敷、

典型的な焼畑山村である本川根地域の桑野山村においては、史料9のように、近世の後期にいたり、焼畑の維持・拡大とは反する利用形態として、焼畑の跡地に材木の植林がなされ、村内において問題となり、禁止されたことが判明する。

すでに、飛騨の白川郷を事例として、溝口氏が近世中・後期における焼畑面積の拡大を明らかにされているが、大寸又とその周辺地域の事例のように、新規の焼畑禁止令が発令され、およそ守られている地域も存在していたのであり、地域ごとの差異に十分留意した近世中・後期におけるさらなる実態解明の必要性を痛感する。

三 近世における焼畑百姓の土地所有と生業の実態

元禄三年（1690）に、上田村の海野弥兵衛が当時の枝郷であった大寸又の焼畑百姓の由来を述べた文書には、

史料9 元禄3年（1690）大寸又の百姓の由来につき海野弥兵衛訴状控¹⁷⁾

一 大寸又之者共、宗旨御改之人別帳・五人組帳とも、上田村之内江書記差上申候、上田村之内、畑少も持不申、何も焼畑計_{二冊}身命送り申候、

典型的な焼畑山村である大寸又では、焼畑のみが営まれ、常畑は少しも所持していないと記されている。

けれども、大寸又をめぐり、長年にわたる国境論争が繰り広げられ、元禄15年（1702）末に駿河国安倍郡の上田村から、遠江国榛原郡の千頭村に所属変更することで最終的な決着を見た。翌年の元禄16年（1703）3月には、大寸又に検地が行われ、「千頭村之内大寸又畑屋敷改帳」と「遠州榛原郡大寸又宗門人別改帳」、そして、焼畑に関する「大寸又作場改帳写」（以下、「畑屋敷改帳」「人別改帳」「作場改帳写」と略記する。）が作成された。

上記の3史料¹⁸⁾のうち、「大寸又作場改帳写」によれば、上田村から千頭村に所属変更となった典型的な焼畑山村である大寸又には、合計25枚の焼畑の作場の存在が把握されており、作場ごとに、山地が伐り拓かれた年代と、過去および現在の耕作者名などが記載されている。すでに、前稿で論じたように、百姓たちによって書き上げられた大寸又の山中で営まれてきた25枚の焼畑のうち、改帳が作成された元禄3年（1703）3月の時点において、実際に耕作されていたのは17枚であり、残りの7枚は耕作されずに「あらし」置かれていた。他方、同年に作成された「人別改帳」に記載されている焼畑百姓28軒のうち、1枚のみ焼畑を耕作していた百姓が15軒、2枚耕作している百姓が6軒、残りの7軒に関しては、大寸又の山中では焼畑の耕作を確認できない。

このように、駿州の上田村から所属替えとなった遠州千頭村内の大寸又において、山中に数軒ずつ散居して焼畑を営んでいた百姓は、自村である大寸又の広大な山中に限れば、毎年、焼畑耕

作を営んでいたことが認められないのである。自村である大寸又の山中での焼畑耕作が確認できない当該の焼畑百姓は、どのようにして生活していたのであろうか。

同じく、前稿で検討を加えた天竜川中流域の草木村の焼畑に関する貞享1年（1684）の「草木村山地焼畑書出覚」¹⁹⁾にも、同年に営まれていた39枚の焼畑耕作の実態が詳細に記載されている。この史料では、小庄屋である弥五左衛門をはじめとする焼畑百姓たちは、草木村内の山中においては連年の耕作を営んではいないのである。自村内の山中で焼畑耕作が確認されない当該の時期、焼畑百姓はどのようにして生活していたのであろうか。

そこで、注目すべきは、表1の中に村外からの入作者が散見されることである。大寸又の広大な山中に、周辺の村々から入り作がなされていたと同時に、大寸又から周辺の他村へと出作りをなしていたと想定されよう。

まず、大寸又の山中に、周辺に位置する他村から入り作をなしていた関連史料を引くこととしたい。

史料10 元禄9年（1696）大寸又惣兵衛の儀につき大寸又百姓等訴状²⁰⁾

久春御山役御年貢覚書事

（中略）

一 諸役、惣兵衛殿ハ致地脇之分四人御座候、此四人物共之作ハ寸又内よき所計り作らせ被使申候事、（中略）

一 大間川内山段々作場有之候へ共、遠州物共入こミ作仕候故、依之作はつまり申候、

史料10は、大寸又の所属が変更されて上記の3史料が作成された元禄16年（1703）の7年前のものである。この史料を作成したのは大寸又に居住して焼畑を営んでいた焼畑百姓等であり、母村である井川の上田村に住する戦国以来の豪族百姓である海野弥兵衛に対して、大寸又の支配を任されていた望月惣兵衛の不正を訴えたものである。

大寸又の焼畑百姓等が訴えた内容のうち、2点のみ引いたが、上記の一点目では、惣兵衛は抱えていた地脇百姓である4人（五郎兵衛・小次右衛衛・半右衛門・忠吉）に大寸又の山中の良い山地ばかりをあてがって焼畑の作場を営んでいると訴えている。二点目では、大寸又山中の大間川内山にも焼畑の作場があり、隣接する遠州の者共が入り込んで焼畑を営んでおり、そのために焼畑の耕作に窮していると述べられている。史料10からも判明するように、元禄15年（1702）の年末に所属が変更される前も後も、広大な大寸又の山々には、周辺の村々から焼畑の入り作がなされていたのである。

一方、大寸又に居住する焼畑百姓等も、新規の焼畑耕作が禁止されていた状況下において、自村の山々で毎年焼畑を営んではいなかったが、周辺に位置する村々に出作りの焼畑をなしていたと判断されよう。

史料11 元禄9年（1696）大寸又望月了無先祖書²¹⁾

（前略）

一 元禄六年戊年、下閑蔵惣兵エ所へ松井源之助様御登り被成候而、山々焼畑之御被為成、先年通り御書留被成御座候、

一 十左衛門・三郎左衛門作場、犬間村_三枚、大間平村_三枚、泉村山_三貳拾枚、
メ貳拾六枚、遠州領_三御座候、

上田村の海野弥兵衛から大寸又の支配を任されていた望月了無が書き記したこの史料によれば、元禄6年（1693）に松井源之助が大井川の上流に位置する大寸又まで登り来たり、広大な大寸又の山々で営まれていた焼畑の調査がなされ、先年通りに書き留められた。また、大寸又の山内に居住して焼畑を営んでいた十左衛門（庄野尾に居住）と三郎左衛門（日向に居住）の両名は、自村である大寸又の他に、周辺に位置する犬間村に3枚、大間平村に3枚、泉村に20枚、合計26枚もの出作りの作場を営んでいたことが判明する。

もとより、この出作りの作場である26枚が、毎年、耕作されていたとは考え難いが、自村内に焼畑に適した広大な山々を擁する大寸又の焼畑百姓たちも、積極的に周辺の村々の山に出作りをなし、焼畑の作場を有していた事実は重要である。近世前期における焼畑の出作りの実例に関しては、大和国吉野地方の河上郷を事例として、すでに、米家泰作氏がその実態を明らかにされている²²⁾。

では、枝郷である大寸又も支配していた上田村に居住する海野弥兵衛が上記の史料9で「大寸又之者共、…上田村之内、畑少も持不申、何も焼畑計_二而身命送申候、」と述べている、大寸又の百姓たちが山中での焼畑のみに従事し、常畑を少しも所持・耕作していないと言う代官所への訴状の文言は、多様な生業を営んでいた焼畑百姓の実態を反映してはいないと判断されよう。

その実態の一端を明らかにしうるのは、大寸又の所属が変更された翌春に実施された元禄16年（1703）3月に実施・作成された「畑屋敷改帳」である。この史料には、大寸又に居住していた焼畑百姓たちが所有していた屋敷の面積と、上畑・中畑・下畑に分けられた畑の面積も記載されている。表1では、同年月に百姓たちが作成して代官所に提出した「作場改帳写」と「宗門人別改帳」の記載内容も含めて作成している。

以下においては、元禄期の典型的な焼畑山村の実状を、いくつかの項目に分けて、検討を加えることとしたい。

まず、大寸又における居住の実態から復原したい。「畑屋敷改帳」には、支配を任されている望月惣兵衛をはじめとする27軒の焼畑百姓の屋敷地が記載されている。それぞれの名前には居住していた大寸又の地名が付記されている。その地名は、惣兵衛が住んでいる「下閑草」をはじめ、「上閑草」に1軒、「天地平」に2軒、「上西河内」に4軒、「西河内姥懐」に2軒、「東山」に2軒、「庄野尾」に5軒、「日向」に5軒、「湯山」に2軒、そして、地名が付記されていない屋敷地が3軒である。

同年月に作成された「人別改帳」も勘案すれば、広大な大寸又の山中に、数軒ずつの焼畑百姓が散居していた実態が判明する（図2・写真1）。まず、寸又川最下流の「湯山」に、三蔵と忠吉の2軒・10人が居住していた。その少し上流に位置する下閑草と上閑草に望月惣兵衛と力右衛門のそれぞれ1軒・8人ずつ、散居していた。さらに、寸又川に沿った上流に向けて、「日向」に5軒、「西河内姥懐」に3軒・18人、「上西河内」に3軒・16人、「天地平」に2軒・9人、そして、最上流の「庄野尾」に5軒がそれぞれ散居していたことが判明する。

2軒の焼畑百姓が居住していた「東山」のみは関連する地名が残されていないために居住地の比定は困難であり、地名が付記されていない百姓が3軒ある。このように、広大な大寸又の山中に、1軒に数名ずつの家族が居住して、1軒から5軒に及ぶ焼畑百姓が、およそ10か所に分かれて散居していた実態が判明する。

表1 元禄13年（1703）の大寸又の焼畑百姓の常畑所有と村内での焼畑耕作の状況

番号	氏 名	屋 敷	上 畑	中 畑	下 畑	焼畑の耕作	家 族
1	惣 兵 衛	1畝4歩	－	－	2畝	2人で共作・1枚	8人
2	力 右 衛 門	24歩	－	－	2畝	（当年は不作）	8人
3	三 蔵	8歩	－	－	－	2人で共作・1枚	5人
4	忠 作	8歩	－	－	－	2人で共作・1枚	7人
5	徳 左 衛 門	8歩	－	－	1畝15歩	2人で共作・2枚	6人
6	五 郎 右 衛 門	14歩	18歩	12歩	19歩	7人で共作・1枚	9人
7	小 次 右 衛 門	10歩	－	－	1畝12歩	7人で共作・1枚	9人
8	四 郎 兵 衛	10歩	－	－	1畝6歩	7人で共作・1枚	6人
9	忠 吉	3歩	－	－	－	2人で共作・1枚	3人
10	四 郎 左 衛 門	10歩	2畝	8歩	1畝18歩	3人で共作・1枚	5人
11	長 次 右 衛 門	17歩	－	－	1畝2歩	3人で共作・1枚	6人
12	元 右 衛 門	24歩	1畝26歩	4畝8歩	2畝12歩	（当年は不作）	6人
13	源 之 助	12歩	2畝	－	1畝10歩	2人で共作・1枚	3人
14	三 右 衛 門	11歩	－	1畝10歩	－	1人で作・1枚	6人
15	佐五右衛門	11歩	－	20歩	12歩	1人で作・1枚	5人
16	五 郎 左 衛 門	10歩	－	－	2畝18歩	3人で共作・1枚	5人
17	十 三 良	15歩	1畝	1畝5歩	－	3人で共作・2枚	8人
18	十左衛門後家	20歩	－	18歩	15歩	（当年は不作）	3人
19	石 右 衛 門	不明	不明	不明	不明	不明	8人
20	松 右 衛 門	12歩	－	－	－	3人で共作・1枚	7人
21	次 左 衛 門	不明	不明	不明	不明	不明	4人
22	定 右 衛 門	18歩	－	－	1畝10歩	（当年は不作）	4人
23	友 右 衛 門	不明	不明	不明	不明	不明	14人
24	与 右 衛 門	20歩	12歩	1畝6歩	18歩	（当年は不作）	6人
25	八 郎 兵 衛	11歩	－	－	－	3人共作・1枚	6人
26	三十郎後家	12歩	－	－	1畝6歩	1人で作・1枚	5人
27	権 兵 衛	11歩	－	－	1畝15歩	1人で作・1枚	5人
A	平 十 郎	9歩	－	1畝	－	7人で共作・1枚	不明
B	三 郎 左 衛 門	10歩	－	1畝	－	不明	不明
C	与 太 夫	1畝2歩	－	－	6畝23歩	7人で共作・1枚	不明

注）番号1から27は「人別改帳」を基本として作成。

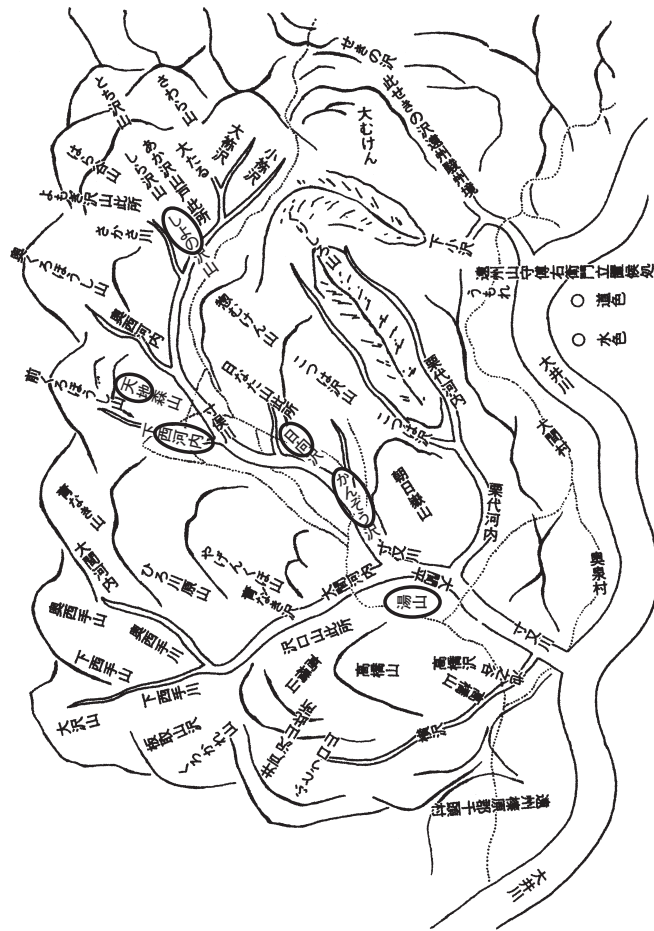


図2 元禄年間の絵図による散居の状況
(『本川根町史』資料編3より引用、湯山の地名を加筆)



写真1 大寸又の屋敷跡
(『本川根町史』通史編2より引用)

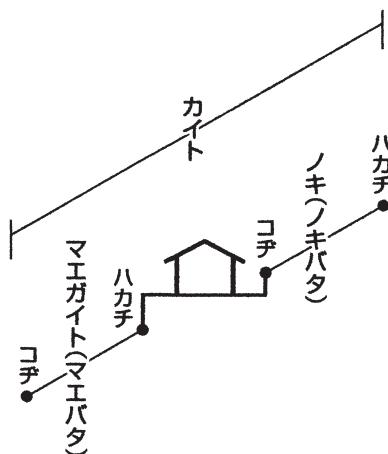


図3 カイトの空間概念図
(注14より引用)

山腹に建てられた屋敷の周囲に拓かれた常畑は「カイト」と呼ばれている。図3として引用したように、屋敷の上の常畑は「ノキ」または「ノキバタ」と呼ばれ、屋敷の下の常畑は「マエガイト」または「マエバタ」と呼ばれている。これら屋敷の周囲の常畑では、黍やトウモロコシ、シコクビエや里芋、コンニャクや大麦・小麦などが植えられている。さらには、その一部に、茶や桑・楮なども栽培されていたのである。連作障害を避けるために、適宜、作物を循環させながら、自給食料の一部が栽培されていた。

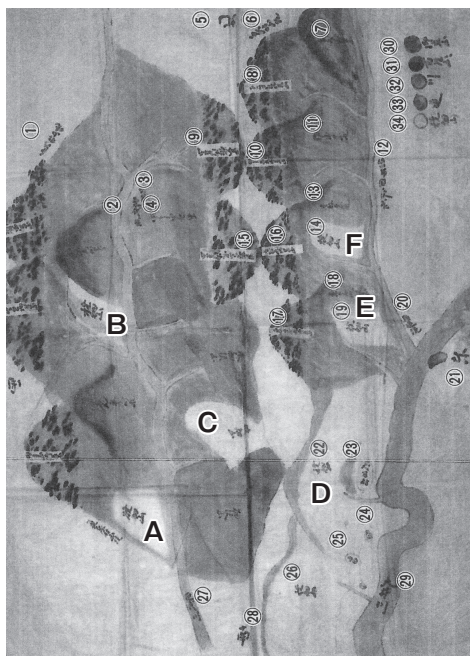


図4 犬間村焼畑絵図(年未詳)
焼畑山にA～Fを記入
(『本川根町史』通史編2より引用)

ついで、焼畑百姓の常畑の所有については、元禄16年(1703)3月に作成された「畑屋敷改帳」によれば、記載された27軒の焼畑農家のうち、22軒が狭いながらも、焼畑ではない常畑を所有して、畑作を営んでいたことが判明する。最も広い常畑を所有していたのは寸又川上流の天地平に居住していた元右衛門であり、上畑1畝26歩・中畑4畝8歩・下畑2畝12歩の合計8畝16歩の常畑を所有・耕作していた。ちなみに、大寸又でこの時に検地・登録された常畑のそれぞれの合計面積は、上畑が7畝26歩・中畑が1反1畝27歩・下畑が1反2畝21歩である。

静岡県北部に位置する焼畑地域の家屋とその周囲で耕作されていた常畑に関しては、現地調査に基づく野本氏の報告²³⁾が貴重である。静岡県の北部地域では、

元禄5年(1692)の史料²⁴⁾に基づけば、大寸又にはほど近い同じく焼畑山村である田代村の常畑で栽培されていた作物は、「畑方_二ハ、稗芋多ク作り申、大豆・小豆入こ_一作り申、きび・そば少作り申、」と記されており、当時、主に栽培されていたものが稗・里芋と大豆・小豆であり、黍と蕎麦の栽培は少なかったことが判明する。野本氏の現地調査と比べれば、時代とともに、栽培されていた作物にも変化があったと想定しておくべきであろう。

面積的には狭いながらも、山中に散居している焼畑百姓たちにとって、屋敷地の周辺に耕作していた常畑である「カイト」の重要性は明らかである。大寸又の山中で最も広い8畝余の常畑を所有・耕作していた元右衛門は、同年の「作場改帳写」によれば、自村内の山で焼畑を営んでいないことが判明する。屋敷地の周囲に拓かれた8畝余の常畑での耕作をなし、周囲に位置する犬間村を

はじめとする他村の山中へ焼畑の出作りをなしていたと想定されよう。

大寸又を実質的に支配していた望月惣兵衛は、2畝の下畑を所有・耕作するのみであり、主に大寸又や周辺に位置する他村の山中で営まれていた出作りの焼畑などに食料生産の中心がおかれていたものと想定されよう。

ただし、大寸又の広大な山中に散居して焼畑を営んでいた27軒の百姓のうち、5軒は村内での常畑の所有・耕作が認められないことも留意しておきたい。

これら山中で貴重な自給食料を生産していた考えられる屋敷地周辺の常畑である「カイト」の石盛は、本村である千頭村の上畑が反別十・中畑八・下畑五であるのに対して、枝郷である大寸又では上畑七・中畑五・下畑三と、それぞれ低い石盛が付されていた。

最後に、典型的な焼畑山村である大寸又の周辺地域で営まれていた、その他の多様な生業の一端を述べておきたい。野本氏は、明治36年生に本川根町の長島に生まれた長島英雄が大正7年に記した日記に基づいて、当時の貴重な焼畑農家の生業を復原されている²⁵⁾。それによれば、長島家は、数か所の山々で営まれていた焼畑で芋・稗・粟・大豆・小豆・蕎麦などの食料を確保しながら、跡地での杉・桧の植林や森林の伐採・出材作業、お茶の栽培と製茶、養蚕、椎茸や山葵の栽培など、実に多様な生業を複合的に営んでいたことを明らかにされている。また、溝口氏は、山梨県西部の巨摩郡西河内領の焼畑山村を事例として、近世以後の関連史料を博搜され、焼畑の耕作以外に、杣仕事や木材運搬、木製品の製造、金山での労働、楮・三桠・茶・煙草など商品作物の栽培と、多様な生業を組み合わせながら生きていた実態の一端を明らかにされている²⁶⁾。

今後、当時の一次史料に基づいて、これら焼畑山村で営まれていた多様な生業の実態とその変遷を、より詳細に明らかにしたいと念じている。

五 おわりに

本稿は、溝口常俊氏と千葉徳爾氏の先行研究に多くを学びながら、近世において営まれていた焼畑と焼畑百姓の実態に関して、焼畑禁止令とのせめぎあいと、焼畑百姓の常畑の所有などについて、若干の検討を加えたものである。ささやかな成果は、以下のようにまとめることが可能であらう。

第一に、大井川の上流に位置する典型的な焼畑山村である本川根地域の大寸又とその周辺の村々には、管見の範囲においては、延宝3年（1675）頃に山地の荒廃や水害の多発などを防ぐために、幕府の代官により焼畑の禁止令が発令されていた。焼畑百姓たちは代官に願い出て、新規に山地を伐り拓いて新たな焼畑を営まないことを条件として、旧来より営んできた由緒を有する山地を伐り拓いて焼畑を営むことが認められた。当該の本川根および周辺の焼畑山村においては、近世の前期から中期の半ばまで、新規の山地を伐り拓いて焼畑の面積を拡大することは困難であったと考えられる。旧来から営まれてきた由緒ある山地のみで営まれる焼畑に対して、近世前期におこる人口の増大に対応するために、古代・中世から営まれてきた同一の山地を酷使しない「一年作り」の焼畑から、同一の山地をより酷使する「二年作り」や「三年作り」、近世中期以後にさらに酷使する「四年作り」や「五年作り」などの中・長期的なローテーションからなる焼畑の農法へと変化を遂げた可能性が想定される。

この点は、焼畑の禁止令が発令されていた地域や発令されていない地域も含めて、さらなる慎重な検討と事例の蓄積が必要である。

第二に、前稿では、焼畑耕作を営む百姓が毎年焼畑を営んでいない可能性を述べたが、本稿の検討により、大幅な訂正を加えねばならない。すなわち、前稿での検討は、天竜川の中流域に位置する草木村と大井川の上流に位置する大寸又を事例として、もとより当時の一次史料から検討したが、草木村と大寸又の両村内の山地に限れば、焼畑百姓たちが毎年焼畑を営んではいないように当該の史料からは読み取れる。ただし、現実には、両村の焼畑百姓たちは周辺に位置する他村の山地に出作りして焼畑を積極的に営んでいたことが判明した。

すでに、千葉氏が焼畑関連の史料を取り扱う際に注意を促しているように、「検地帳」などに記載された焼畑は、毎年、耕作されている焼畑の農地ではなく、旧来からの由緒により焼畑の耕作が認められた山地であると理解されよう。

第三に、大寸又の焼畑百姓たちは、広大な大寸又の山中に数軒ずつ10か所ほどに分かれて散居しており、狭いながらも、屋敷地の周辺に常畑を所有していたことが判明した。この点は、現在でも、同地の屋敷の周辺に「カイト」と呼ばれる常畑を営み、様々な穀物や野菜などが栽培されている状況と同一である。

ただし、本稿で検討を加えた元禄16年（1703）の「畑屋敷改帳」「宗門人別改帳」と「作場改帳写」に関しては、以下の留意が必要である。すなわち、幕府の代官所によって作成された前二者の史料と、大寸又の百姓たちによって書き上げられた「作場改帳写」において、名請けした焼畑百姓の名前に5軒の相違が認められる。そのうち、「宗門人別改帳」によって個々の家族の名前も勘案すれば、5軒の内2軒は当主の死去に伴う息子による名請けの変更であろうと想定される。残りの3軒に関しては、両史料間の名請け人の相違の理由は不明である。当時の一次史料を検討する場合、慎重な扱いが必要であることは多言を要さない。

今後は、近世における焼畑に関する一次史料をさらに収集・検討し、当時の焼畑の実態とその変化をより詳細に復原・解明し、現地調査によって蓄積されてきた近現代以後の焼畑耕作との差を明確にしたいと念じている。

付記 千葉徳爾先生のご霊前に、生前のご指導に感謝申し上げ、本稿を謹んで献呈させていただきます。なお、琉球大学の花本宏直氏に、貴重なご助言をいただきました。

注と参考文献

1) 伊藤寿和（2000）「紀伊国の『山畑（焼畑）』に関する歴史地理学的研究」、史境41号。

同（2010）「近世における会津地域の『焼畑（鹿野畑）』に関する基礎的研究」、日本女子大学紀要・文学部、59号。

同（2010）「近世前期における焼畑耕作の実態について」、史草51号。

同（2012）「近世における焼畑山村の家族の実態と焼畑農法の変容について」、日本女子大学紀要・文学部、61号。

2) 佐々木高明（1971）『稲作以前』、日本放送出版協会。

同（1972）『日本の焼畑』、古今書院。

同 (2009)『日本文化の多様性 稲作以前を再考する』、小学館。他多数。

野本寛一 (1986)『焼畑農耕文化論』、雄山閣出版社。他多数。

橘 礼吉 (1994)『白山麓の焼畑農耕』、白水社。

近年、横山智氏が、ラオスを事例として、現在の焼畑に関する全面的な再検討を進めつつある。焼畑を耕地として理解する「農学者的視点」だけでは焼畑農民の生活は完結せず、休閑地からも安息香をはじめとする多くの有用植物を入手する在来知の実態を明らかにされ、焼畑を休閑地も含みこんだ「森畑」と理解する視野を提示されている。

横山 智・落合雪野共編 (2008)『ラオス農山村地域研究』、めこん。

同 (2012)「焼畑再考 - ラオス山地民の森林利用から学ぶもの -」第21回雲南談話会での報告など。

3) 伊藤寿和 (2013)「近世における焼畑山村の人口移動とその実態」、日本女子大学紀要・文学部、62号。

4) 溝口常俊 (2002)『日本近世・近代の焼畑地域史研究』、名古屋大学出版会、2002年。

5) 千葉徳爾 (1986)「天竜川溪谷の焼畑」『近世の山間村落』、名著出版。

6) 本川根町 (2000)『本川根町史』、資料編 3・近世二。

7) 本川根町 (2000)『本川根町史』、資料編 2・近世一。

8) 前掲 7)。

9) 前掲 6)。

10) 前掲 7)。

11) 前掲 7)。

12) 前掲 7)。

13) 前掲 6)。

14) 野本寛一 (2012)『自然と共に生きる作法』、静岡新聞社。

同 (1982)『大井川』、静岡新聞社。

同 (1986)『焼畑農耕文化論』、雄山閣出版社。

15) 前掲 6)。

16) 本川根町 (2005)『本川根町史』、通史編・近世。

17) 前掲 7)。

18)『大寸又畑屋敷改帳』、前掲 7)。

『大寸又宗門人別改帳』、前掲 7)。

『大寸又作場改帳写』、前掲 7)。

19) 静岡県 (1994)『静岡県史』、資料編十一、近世三。

20) 前掲 7)。

21) 前掲 7)。

22) 米家泰作 (2002)『中・近世山村の景観と構造』、校倉書房。

23) 野本寛一、前掲14)。

24) 前掲 7)。

25) 野本寛一、前掲14)。

26) 溝口常俊、前掲 4)。